

日本フィルハーモニー交響楽団

被災地に音楽を

～ 東日本大震災 被災地での6年間の活動記録 ～



2013年3月 石巻門脇地区



2014年4月 雄勝ローズファクトリーガーデン

石巻市雄勝町でのコンサート開催にご協力いただいた、全壊した雄勝小学校の先生が、被災した方々が故郷とつながる場として、花畑を作る物語を思い描きました。世界中から花の苗が集まり、立派なバラ園ができあがりしました。花を増やし、人が集い、支援が集結する、そのプロセスに先生は希望を見出しました。それが雄勝ローズファクトリーガーデンです。

「音楽家に何ができるか」を問いながら

「被災地に音楽を」の活動は6年を経て200回を超えました。

震災の日とその後、広域にわたって甚大な被害を受けた東北の映像を目のあたりにし、抗うことのできない自然の力の凄まじさを改めて実感させられました。被災された方々の状況を直視することができず、なんともやりきれない思いを感じると同時に、「自分に何かできることはないのか、これでよいのか」と、多くの人々が深く思い悩みました。

私たちは音楽団体として、音楽家として、自分たちには何ができるのだろうと問い続けました。そして、被災された方々に音楽を届けることで被災された方々に少しでも寄り添い励ますことが大事なのではないだろうかと考えました。

ほんとうにつらい時、傷ついた人にかける言葉はあまりに難しく、あまりに無力です。しかし音楽は不思議な力を持っていきます。癒しの力、励ましの力、人と人の心をつなげるコミュニケーションの力、歓びの力。音楽の力を通じて、生きていくことへの共通の思いを届けていきたいと強く思いました。

この思いに共感いただいた多くの個人の皆さまからの温かい寄付と、現地の方々の協力によりスタートしたこの活動の輪は、その後、賛同してくださった企業に広がり、避難所、仮設住宅居住者、学校の児童・生徒等や故郷を離れて避難されている方々を対象として、コンサートや演奏指導を実施してきました。この「被災地に音楽を」の活動は6年間途切れることなく今も継続され、これにより新たに繋がった多くの方々との交流も続いています。

私たちが、被災地の方々にどれだけ寄り添えたかは分かりませんが、でも、状況が変わっていく中、これからも音楽が必要とされるのであれば、この活動を終えることはありません。

日本フィルハーモニー交響楽団一同



©山口敦



震災当日のコンサート会場客席

東日本大震災発生の日

東日本大震災が発生した2011年3月11日の夜、日本フィルは都内の定期演奏会を予定していました。地震発生を受け、安全の確保、質の高い音楽の提供を大前提とし、お客様が一人でも来場されるのであれば予定通りコンサートを開催することとしました。

当日は77名、翌日は758名のお客様にご来場いただきました。お客様、指揮者、演奏家が哀悼と祈りを込めた演奏会は、ホール全体がひとつとなった独特の雰囲気の中で行われました。

「被災地に音楽を」のはじまり

震災から一週間後の香港公演では、多くの方より心からの励ましの言葉をいただきました。音楽には人の心を癒し励まし、勇気づける力があることを信じ、被災地を応援したい国内外の人々の気持ちを音楽を通して届けようという思いを強くしました。

この思いと、20年前の阪神淡路大震災で1年にわたり音楽を届け続けた時の思いが重なり、2011年4月6日、福島県浪江町からの避難者を受け入れていた同県二本松市の避難所に3人の楽団員がボランティアとして訪問。ヴァイオリン、ヴィオラ、トロンボーンによる屋外での演奏を実施しました。



二本松市の避難所での初の演奏



石巻市の高齢者施設での楽器体験

熱い思いとともに

200回を超えた活動

個人の皆さまの「被災された方々を心に響く音楽で癒し、そして励ましてほしい」という熱いメッセージとともに寄せられた寄付と、この活動に自らの意志で参加しようとしていた楽団員の思いが合さり、「被災地に音楽を」は始まりました。これまで、延べ約1000人の楽団員がこの活動に参加し、延べ200を超える会場に心やすまる音楽をお届けしてきました。

本冊子では、「被災地に音楽を」の内容と、これに共感しご協力いただいた方々のお言葉、参加した楽団員の思いなど、6年間に亘る日本フィルの活動を紹介します。

日本フィルが見た

被災地と活動の推移

新築された病院の前に建てられた復興公営住宅(宮城県南三陸町)



高上げ工事用ベルトコンベアの橋(岩手県陸前高田市)



全線開通した三陸鉄道(岩手県大船渡市)



町役場前で唯一開店していたコンビニ(福島県浪江町)



倒れたチリ地震津波高指標(宮城県南三陸町)



慰霊祭開催地の周辺(宮城県名取市)



3月11日
14:46
東日本
大震災
発生

2017年

(避難者数 約13万人)

第200回

2016年

(避難者数 約17万人)

2015年

(避難者数 約23万人)

第150回

2014年

(避難者数 約26万人)

2013年

(避難者数 約31万人)

第100回

2012年

(避難者数 約34万人)

第50回

2011年

(避難者数 約47万人)

第188回 2016年5月6日

創造力や意思疎通力の醸成を目的とし、南相馬市の中学生を対象にマイケル・スペンサーによる音楽ワークショップを実施。



第177回 2015年6月20日

市民アンサンブルへの初の楽器指導を岩手県宮古市の公民館で実施。



第148回 2014年7月16日

岩手県釜石市の小中学校の仮設体育館でのピリープの合唱。



第80回 2012年9月30日

都内に避難している被災者を対象に、江東区の教会でコンサートを開催。



第29回 2011年7月10日

宮城県南三陸町の中学校、高校で震災後初の演奏指導。



第1回 2011年4月6日

被災地での初の演奏会を福島県二本松市の避難所で実施。



第200回 2016年11月1日

200回目のコンサートを石巻市のカフェで開催。来場された方との懇親会も実施。



第184回 2015年11月30日

大船渡市、南相馬市のホールで、子どもとその家族を対象としたコンサート「動物の謝肉祭」を開催。



第153回 2014年11月8日

継続して支援している福島県南相馬市の中学校吹奏楽部が、日本フィル本拠地の杉並公会堂の荻窪音楽祭で演奏。都内の中学生との交流会も実施。



第113回 2013年6月23日

石巻の市民楽団等が1973年の初演から10年毎に公演していた「カンタータ大いなる故郷石巻」。震災の影響で不足していた市民演奏者を、日本フィルから14名が賛助出演。1,400人を超えるお客様と300人以上の出演者による熱気あふれる会場。



第67回 2012年5月21日

仮設住宅集会所での初のコンサートを宮城県登米市で開催。



第5回 2011年5月8日

宮城県名取市関上で行われた慰霊祭での演奏。



「私、楽譜、取ってきます。」「無理な場合は、楽譜を手書きでおきます！」とまで。返す言葉が出なかった。

いよいよコンサート当日、体育館には、4校の児童をはじめ、保護者、避難先からかけつけてくれた方々、そして、楽譜を送ってくださった葛尾小学校の教頭先生の姿も。初めて弦楽四重奏で聞く校歌と他の学校の校歌。子ども時代に歌った校歌が流れると目頭を押さえるお年寄りの姿も。ふるさとを思い、友だちを思い、懐かしさと寂しさが入り交じりな



2012年10月26日 ヴィヴァルディ「四季」のあと、弦楽合奏で元気に歌った校歌

「私、楽譜、取ってきます。」
その言葉に、私は一瞬自分の耳を疑った。帰還困難区域にある学校からどうやって楽譜を取ってくるというのだ。
東日本大震災と原発事故から3ヶ月が過ぎようとしていた2011年6月。日本フィルの弦楽四重奏のメンバーが三春小学校に来てくれるというニュースから、私と日本フィルの不思議な縁が始まるなどその時は思いもよらなかった。
三春小学校の校舎自体は大きな被害を免れたが、当時、福島第一原発から近い富岡町、葛尾村から20名ほどの児童が三春小学校に避難していた。それぞれの児童が避難所であるが、体育館に響き渡る澄んだ音色が私たちの心を癒してくれたことは言うまでもない。不思議な縁はまだ続く。平成26年4月に私が赴任した南相馬市立金房小学校は、福島第一原発から20km圏内にあるため、同市鹿島区にある仮設のプレハブ校舎において、小高区にある4つの小学校が同じ校舎で通常の教育活動を行っていた。

私の中でまたもや「音楽の力」で目の前のこの困難な状況にある子どもたちを何とか勇気づけられないかという思いがわき出て、日本フィルに電話をしたところ、何と素晴らしいことに、「動物の謝肉祭」を映像付きで演奏してくださいとのこと。子どもたちにとって初めての経験どころか、私たち教員にとっても未だかつてないコンサートになることは確実であり、期待に胸がふくらんだ。

会場の子どもたちが演奏に合わせて一緒に歌う曲目も取り入れてくださり、こちらからの要望として「嵐」の『ふるさと』を希望した。NHK合唱コンクール小学校の部課題曲にもなった嵐の「ふるさと」。私も大好きな曲である。

雨降る日があるから 虹が出る
苦しみをぬくから 強くなる……

ふるさとを忘れることなく一歩でも前に進んでほしいと願うこの子どもたちにぜひ歌ってほしい曲でもあった。小学生は高音を、中学生は低音をそれぞれ練習し、演奏会に臨んだ。小高中学校の音楽の先生は、期末テストの課題曲にも取り上げてくれるほどの熱の入れよう。それぞれの立場で「ふるさと」に對



2015年11月30日 小高区の風景が映像に流れ、嵐の「ふるさと」を歌う

私たちが出会った人たち



音楽には「人と場を結び、人と人を結ぶ力」がある。

6年間の被災地訪問活動は主に岩手、宮城、福島の3県で行ってきましたが、時間の経過と地域により、それぞれの「復興」の様相が異なっている実感しています。

私たちが被災地の実情を肌で知ることになったのは、地域や学校でコンサートや吹奏楽のクリニック（演奏指導）をコーディネートしていただいた方々との出会いがあり、時間をかけた相互の学びあいがあったからです。ていねいに作られたコンサートやクリニックの現場で、訪問した日本フィルの楽団員は対象とする方々にむけて、さまざまなプログラムやアイデアを考え出しました。この関係は音楽という目に見えないものを媒体とすることから生まれています。

これまでの取り組みは、関係者すべてが「よりそう」という精神的な一致点から、共益をもたらすコミュニティを創出するという、オーケストラのもうひとつの活動のあり方をしめしてきました。このコーナーでは、そんな方々からお寄せいただいたエッセイを紹介します。

福島
福島県三春町立岩江小学校校長
遠藤 俊一

避難先の学校で忘れないうい、ふるさとのこと

福島県三春町は周辺の楡葉町や富岡町などから避難された方を受け入れてきました。学校にも転校生がたくさんいました。音楽好きな遠藤校長は、なんと子どもたちに音楽を聴かせたいという強い思いで、日本フィルへ電話をかけた。2015年に転勤した南相馬市小高地区の小学校は帰宅困難地区にあり、ここでも小高の小・中学生向けのコンサートを実現させました。

町民体育館や借り上げアパートから通学するという不自由な生活を送っていた。

母校を離れざるを得ない子どもたちが、避難先の学校の校歌を歌わなければならないという複雑かつ困難な現状。今後、避難がいつまで続くかわからないという厳しい状況の中、それぞれの学校にはそれぞれの校歌があることをすべての児童に認識してほしいという願いから、無理を承知で4校の校歌を演奏してもらえないかと願い出た。ところが、三春小学校以外の富岡第一小学校、富岡第二小学校、葛尾小学校の楽譜を手に入れなければならないことにはたと気づいた。

よくよく考えると学校は帰還困難区域にあ

する熱い思いを垣間見ることができた。

当日の演奏会は、予想どおり、忘れられない。そして忘れてはいけない演奏会になった。ラストの曲「ふるさと」を日本フィルの演奏に合わせて参加者全員で歌う時には、ステージに映し出された子どもたちの笑顔や生き生きとした表情、そして、小高区の風景の映像が涙で曇り、声にならなかったのは私だけだろうか。

子どもたちを勇気づける時、ふるさと思いを馳せる時、いつもそこには音楽があったように感じる。不思議な力、心穏やかにさせてくれる魔力が潜んでいるといっても過言ではない。

よくよく考えると、日本フィルの音楽の力に一番勇気づけられたのもしかして私なのかもしれない……。

福島の子どもたちが屋内での生活を余儀なくされ、親たちが放射能被ばくの不安におびえていたころ、日本フィルの事務所所に「福島に来て、子どもたちを励ましてほしい」と切々と訴えるメールが届きました。震災当時、福島市松川町商工会に在籍していた田中さんには福島県中通りのコンサート組織していただきました。

石のように固まった心に染みた音楽

福島

伊達市保原町商工会
田中 幸美

あの震災から間もなく6年目を迎えようとしています。しかし、ここ福島は全てが変わってしまいました。私達は震災後、一生懸命頑張りました。早く元の生活に戻ろう、ただそれだけででした。

しかし頑張っても頑張っても先が見えない毎日、不安定な時間が過ぎていく中で、心を



2011年11月25日 松川町南体育館研修所で。座布団の上でくつろいで

病んでしまうこともありました。

私には二人の娘がおり、上の娘は当時中学生で吹奏楽部に所属。トランペットを担当しており、来る日も来る日も練習に明け暮れていました。

ところがこの震災で学校の再開も遅れ、やっと開催された地区大会では、非常に残念な結果となってしまいました。いつもトランペットや音楽のことを考えていた娘だけに、親として、何と励ましてよいかわかりませんでした。

そんな時、日本フィルの「被災地に音楽を」の活動を知りました。直感的に、もうこれしかないと確信し、ぜひ演奏をしてほしいと文章にならない文章で懇願したところ、すぐ対応して頂けることになりました。落ち込んでいた私達にとって、信じられないほどの出来事！ それからもう無我夢中で準備をしました。町の体育館や市民センター、小学校や福祉施設……。とにかくいろんな所のいろんな方へ、素敵な音楽を届けて頂きたくて。もちろん音楽や演奏ということに飢えていた私の娘が通う中学校の生徒や先生にもです。

そんな中で印象的な出来事がありました。ある体育館で演奏した時、当初予定していた場所から変更して和室で演奏した時のことです。演奏者の方の軽快なおしゃべりですっかり安心したのか、会場にいた方は足を伸ばしたり

一緒に口ずさんだり、思い思いのスタイルで演奏に聴きっていました。中でも「もつと良い服装でくれば良かった」と冗談を言っている人を笑わせていたご婦人が、帰り際にこう言いました。「石のように固まった心に染みた。スーと溶けていったよ。ありがとう」と。シンプルな言葉でしたが、とても嬉しかった。涙が出そうでした。同時に自分もそうだったんだと気付かされました。

これまで「音楽の力」というもの考えたことはありませんでした。しかし、「被災地に音楽を」の事業を通し、その時々で心が求める形に変化していくものではないかと思うようになりました。

余談ですが、トランペットを吹いていた当時中学生の私の娘は大学へすすみ、今演奏学科でトランペットを専攻し、毎日頑張っております。ここまでこれたのも、あの時の演奏のおかげだと思っております。いつか彼女が大人になったら、やっぱりいろんな方へ素敵な音楽を届けてほしいと思っております。



南相馬市鹿島区で障害のある子どもたちのデイサービス事業を始めようとしていた上條さんは、福島第一原発の事故で事業が中止となり、家族もバラバラに避難することとなりました。一人南相馬に残り、林業の仕事に携わるかたわら、日本フィルが南相馬で活動するたびに現地での楽団員の送迎や食事会場の確保など、親身になって引き受けてくれています。

あきらめと希望が入り乱れるふるさとで

福島

南相馬・自然環境応援団
上條 大輔

時間のたつのは早いもので、もう6年がたちました。あの震災、原発事故で会社、家族、人生の計画が音をたて崩れさり、どうしたら良いのか、何をすべきなのか自問自答の日でした。

家族の安全を第一に考え避難をし、自分に出来る事が沢山あったのに、父親として一家の長として決断行動した事が何よりもストレスとなり、肉体的にも精神的にもこたえた日々でした。ほんの1ヶ月位の日数だったのに凄く長い長い時間と日々に感じました。

南相馬に屋内退避解除とともに戻った後、何をどうしていいのか、自分の気持ちが挫けそうな時に知人を通じ日本フィルが被災地で音楽による支援がしたい、協力者を探しているとの相談がありました。当初は正直乗り気ではなく自分自身が助けて欲しいと思い、ま

打ち合わせを初めてした当時は、避難所や仮設住宅でも色々な問題が始め、人々みんなが疲れ、悲しみ、苛立ち、悲壮感いっぱいだった時で、自分もどうコーデイネートして良いかわからなかった事を覚えています。はじめて一緒にまわった、避難所であった小学校、中学校、道の駅で聞いた弦楽奏で人々が静かに、そして感慨深く耳を傾ける姿を見た時、そして自分自身もその演奏に感動し、地域で自分が出来る恩返しに関われた事で少しに変化が生まれました。

その後避難所がなくなり、仮設住宅に人々も移り、学校も再開、日本フィルの被災地支援も南相馬市の中学校の吹奏楽部へのクリニック形式の支援、各地でのミニコンサート、そしてコンサートホールに市民招待へと変わって行きました。どれも関わらせていただきました。オケの演奏者も金管、木管、打楽器、弦楽と本当に沢山の人が忙しき中間を作り南相馬に来てくれました。その中の演奏者との交流が自分にとって本当に大切な時間となっています。今では各演奏者の名前と顔、そして楽器もわかるようになりました。

今現在の南相馬市では至る所に作業員宿舎が立ち並び、復興住宅や沢山の作業員、ところ狭しと走り回るダンプカーや山を切り崩す建設機械や、至る所に忌々しい黒い放射性物質の入ったフレコンの山々……。もう以前のよ



2016年4月2日 南相馬市小高区と同慶寺で。当時、まだ避難指示解除準備区域にあり、周辺に住む檀家が集まった

日本フィルが本拠地とする杉並区と福島県南相馬市は災害協定を結んでおり、震災当初から南相馬市の避難所等での演奏を行ってきました。2年目から市内中学校の吹奏楽部の指導を行い、その中でも原町第一中学校は震災の翌年から全日本吹奏楽コンクールへの出場を果たしています。顧問の阿部先生の熱心な指導に心打たれ、日本フィルは特に集中して訪問しています。

音楽でつながり、 音楽で心揺さぶられ、 音楽で可能性を見つける

福島

南相馬市立原町第一中学校
吹奏楽部顧問
阿部和代

あの日を境に、あらゆることが変わりました。それまで考えもなかった状況が展開し、この先どうなるのかと果然と佇む自分が見えました。学校は休校となり、生徒の顔も見ることができません。「先生、学校はどうなるのですか、吹奏楽部はどうなるのですか」生徒たちからの問いかけの電話がひっきりなしにありました。「こんなことで演奏ができなくなるなんて。こんなことでみんながばらばらになるなんて……」

1ヶ月以上たって、本来とは違う場所で学校が再開しました。生徒数は激減し、日々の授業をやるだけで精一杯の日常があり、



2014年4月5日 若いクラリネット奏者は人気者

ず成績をあげることを優先に考え、がんばらぬに縛られ、何か違う方向に進んでしまいたいような時、荻窪音楽祭への出演の話をいただきました。今まで関わってくださった日本フィルの方々と一緒にステージで演奏できるという夢のようなお話です。それは素晴らしい体験となりました。今まで味わったことのないようなコンサートの雰囲気、私たちに感動しました。マエストロが指揮をし、隣では日本フィルの方が演奏し、会場からは味わったことがないような温かい拍手をいただき、まさに至福の時でした。コンクールでは味わえない音楽の感動がそ

部活動再開など考えられない状態でした。「先生、部活動、いつから始めるんですか」「楽器持ってきて演奏しましょうよ」半分以上に減ってしまった部員たちの切なる思いに心動かされ、活動を再開しました。以前と同じようにはいきませんでした。ただただみんなで一緒に音楽を奏することが楽しく、知恵と情熱を駆使して活動していました。

そんな私たちに、日本フィルさんからクリニックの話が舞い込みました。とても嬉しかったです。同時に、緊張しどのように対応したらよいのかと躊躇した思い出があります。しかし、そんなためらいは杞憂でした。気さくな団員さんたちからレッスンを受けて、生き生きしている生徒たちの姿を見ることができ、来てくださった皆さんの演奏はすばらしく、心動かされ、楽しさのあまり、それまで張りつめていたいろいろな思いが急速に溶けていく感じを味わいました。それが日本フィルさんの「被災地に音楽を」との初めての出会いでした。その時はまさか今に至るまでの長期間の濃い関わりになるとは考えもしなかったです。

春に出会いのクリニック、夏に夏休みコンサートへの招待、秋に演奏訪問と、日本フィルの方々とは次々と私たちに手を差し伸べ、寄り添ってくださいました。その音楽は私たちの心を揺さぶり、力を与えてくれました。「先生、楽しかったです」「こんな

こにありました。そういう場を与えてくださったことを心から感謝しています。

私たちの悩みに寄り添ってくださる活動はまだまだ続きました。管楽器だけでなく弦楽器も味わって勉強してほしいと、演奏とレクチャーをしていただきました。優しい語り口から感じられたのは、熱い情熱と真摯に音楽に向き合う姿でした。震災後、文化的、芸術的な面の教育が思うようになっていきました。私たちが、日本フィルさんの支援はいつも時宜に合った内容で、大変ありがたかったです。

受け身の生徒が多く、表現力が低下してきていると話をすると、マイケル・スペンサー氏のワークショップを展開していただきました。受け身で消極的で、会話のキャッチボールもできないような生徒たちが、驚くことに、ジョン・ケージ氏の偶然性の音楽の手法で、音楽を作り上げたのです。初めはどうなることかとハラハラして見えていきましたが、スペンサー氏とファシリテーターの方々の厳しい音楽的追究に、消極的だった生徒たちがどんどん変わっていく様子を目の当たりにすることができ、エキサイティングな時を過ごしました。子どもたちの可能性の大きさを感じることができたことは私にとって大きな学びとなりました。

私たちが震災で失ったものはたくさんあります。でも私たちに音楽がありました。音楽でつながり、音楽で心を揺さぶられ、



2014年11月8日 荻窪音楽祭で指揮をする阿部和代先生

身近で聴けて感動しました」「私たちのために来てくださるなんて贅沢ですよ」「私も心に響く音楽を奏でたい」「私たちがワクワクするような音楽を表現したい」「私たちもみんなを笑顔にしたい」団員の皆さんと共に過ごした生徒たちは興奮し、ピカピカの笑顔で口々に語りました。音楽は、直接私たちの心を揺さぶります。その揺さぶりによって生徒たちの表情は変わり、意欲というエネルギーがみなぎってきているのを強く感じました。

意欲が充実した私たちはコンクールで成績を上げるようになりました。知らず知らず音楽で意欲が充実し、音楽で子どもたちの可能性の大きさをみつけました。震災後の大変な時期、私たちに寄り添って音楽のすばらしさを体感させてくださった日本フィルの皆さま、音楽の偉大な力とともに音楽は身近にあることを私たちに示してください。私たちが幸せ者です。生徒たちのこれからの人生はきっと音楽と共にあるはずで。「生徒たちよ、強く雄々しく、しなやかに奏で続けてほしい」

音楽万歳!! ありがとう日本フィルハーモニー交響楽団!!



2014年11月8日 荻窪音楽祭「みらい夢コンサート」で杉並区内2つの中学校と合同演奏。指揮は友情出演の藤岡幸夫

大きな津波の被害を受けた石巻で、小学校の教師だった石垣先生は女子美術大学のヤマザキミノリ先生と「アート」による心のケアに取り組みました。先生同士のネットワーキングで、さまざまな出会いが生まれました。

「音楽とアート」 「深刻な状況に寄り添う」

宮城

東松島市在住・元小学校教員
石垣 好春

早いもので3・11の震災から5年9ヶ月が過ぎました。幸いに私は、職場も自宅も被災せず、また家族・親類縁者に犠牲者がいませんでしたが親友・知人を亡くしました。そのこともあって、震災直後は自分にできることは何かと深刻に悩み自問しました。そんな時、5月に東北大学で開催された、メンタルヘルスの研修会で、女子美術大学のヤマザキミノリ教授と出会ったのでした。ヤマザキ教授は、震災直後自ら車で被災地石巻を訪れ、学生たちにヒーリングアートによる支援計画を立てるよう指導されたのでした。

震災時まだ現職の小学校教員でしたので、支援は限られます。コンサートとなれば、一定の広さが必要で、また音響効果等も考えなければなりません。しかし最大の悩みは、「人集め」でした。震災直後の被災地は、生きていくことがやっとなという深刻な状況にありました。

それでも、震災の年の11月に親しくしていた石巻市八幡町にある喫茶店「川べりの散歩道」が引き受けてくれました。ここは旧北上



2016年11月1日 川の上「百俵館」は100人を超すお客様で満員

川河口から2km上流、約3mの津波が押し寄せ大きく被災しましたが、再建したばかりの小さなホールを持っていました。画家でもあるオーナーの三浦さんは、音楽や芸術活動にとっても理解がある方でこのコンサートを積極的に受け入れてくださいました。コンサート当日、会場は満席で立ち見も出る程で驚きました。最後の「故郷」が演奏されると涙をこらえる人たちが何人も見えました。

私のできることは、日本フィルと会場を繋ぐこと、また当日の会場の整理等に限られました。それでもその後、「北上中学校」、「こゝぶのお家いしのまき」、そして16年11月1日に200回目の「雄勝オーリンクハウス」、「百俵館」でコンサートが実現しました。心配することも多かったのですが、自分も、被災した住民のためにコンサートを創っている

「こゝぶのお家いしのまき」には計4回伺っています。担当者も3人に出会いました。近くに大きな仮設住宅があり、デイサービスや交流サロンなどをたびたび行っています。地域のセンターとして被災者の方々と深く結びついています。毎回、おいしい手作りのランチとお菓子をいただきました。

「昼下がりの交流サロン」 また来てくれてありがとう

宮城

社会福祉法人 こゝぶ福祉会
小山 明美

11月2日（水）午後 いしのまきの交流サロンには、入りきれない観客であふれました。

「二番前の席で生の音楽を聴きたいから早くきてしまった……」と開演1時間前に会場にきた観客もいました。開演の20分前には準備したイスはほぼ満席になってしまい、施設内の空いている椅子やソファ一まですべて運び込み、それでも立ち見の観客が出てしまいました。

震災から5年6か月、石巻市へ向かう高速道路から見える復興住宅や建築中の住宅が左右に見えます。慣れない地域で生活している方、いまだ仮設で生活をしている方も沢山いらっしゃいます。

この「音楽のおくりもの」を一人でも多くの方に知ってもらうために、チラシや宣伝場所を工夫し仮設住宅や地域の方々が集まる場所、生協のふれあい喫茶や月1回の

「サロンであいましょう」などへ足を運びました。仮設住宅では2年前の演奏会へ来てくれた方に会うことができました。まだ仮設での生活が続いていて、「つらい生活の中でも音楽を聴くことによりまた頑張ろうと思う気持ち」がわいてくる、また生演奏が聴けると思うとうれしい、楽しみ……と笑顔でお話ししてくださいました。

また新聞への掲載をみて問い合わせも多く、入場無料で事前申し込みがないため当日の観客数が予測できませんでした。

昼下がりの交流サロンの窓際には日本フィルの皆さんがスタンバイされ、息を飲む静けさの中で弦楽四重奏の音色がフロアーに響きました。

音楽が流れるなか観客の方を見ると、顔の表情が何かしらゆるくなる方、笑顔になる方、音楽に合わせて体を揺らしたり、ハンカチを片手に聴いている方もいました。



2014年4月29日 こゝぶのお家いしのまきで、はじめての楽器体験

という喜びも感じられました。後日、当日鑑賞した方（一関市在住63歳男性）が、地元河北新報に感想を寄せています。

私と日本フィルとの出会いは、教職に就いて2年目、「友よ未来をうたえ」という、日本フィルをテーマにした映画を見た事に始まります。いまでは当たり前になっている「市民とともに歩むオーケストラ」ですが実践することはなかなか難しく、日本フィルも大きな困難を乗り越え現在があるのだと思います。財政的にも決してゆとりなどないはずのオーケストラ運営の中、被災地に「寄り添う」活動は多くの被災した住民に深く響き、大きく励ますものになっています。

「被災地に音楽を」に感激

63歳
（一関市・元小学校教員）
10月28日、宮城県南三陸町で30年ぶりに同級生4人と再会を果たしました。翌日、石巻市在住の友人の案内で東日本大震災被災地を巡りました。

石巻市雄勝町の「オーリンクハウス」で休憩を取りました。被災した雄勝町のコミュニティ再生を目指して建てられた交流施設です。置いてあったチラシを手に取ると、3日後、日本フィルハーモニー交響楽団の有志による弦楽四重奏が開催されるとあり、心引かれました。

11月1日、92歳の母を伴い一関市から車で2時間かけて再訪しました。小さな建物の中に、地域の方々50人ほど集まりました。曲

目はバルディの「四季」や「見上げてごらん夜の星を」など10曲。地域の方々に交じって、美しい音色に耳を傾けました。

震災後、日本フィルは市民や企業からの支援をもとにボランティア活動「被災地に音楽を」を開始し、その日がちょうど200回目の公演でした。

平井俊邦理事長の「これからも音楽を通して被災地に思いを届けたい」というあいさつに感動しました。こうした地道で長い活動が復興の後押しになることを願ってやみません。

2016年11月12日
河北新報掲載

養、元気がでるね。音楽最高!!」「やっぱりは違うね。心に響くものがある」ということばが。

日本フィルの皆さんのご配慮で、クラシックや民謡などのなじみのある曲を演奏していただき、観客の皆さんと一緒に歌い、フロアーの全員が「音楽」の力によって気持ちがひとつになれたこと、そして音楽は人の心を動かす魔法のようなものだと改めて感じました。

岩手県北三陸地区は東京から遠く、支援の届きにくい地域です。日本ユネスコ協会連盟の協力で、3年目から釜石、宮古、山田町、野田村、普代村、田野畑村などに行きました。宮古市教育委員会は、学校や学童クラブなどと緊密な連携がありたくさんの校長先生と知り合いました。伊藤さんはアマチュアオーケストラに所属し、2016年12月の訪問をコーディネートしてくださりました。

2年間の休職から 音楽の力で心の復興

岩手

宮古市教育委員会文化課
伊藤 哲

震災直後の宮古市内は、どこまで行ってもがれきの山と潰れた多数の車が連なり、大量の埃と海から打ち上げられたドロで、さながらニュースや映画で見る戦場のような様相でした。

私は、東日本大震災発災後、宮古市役所内に設置された被災者支援室に勤務しました。被災者支援室の業務は非常に多岐にわたり、避難所の運営、仮設住宅への移転、義援金や支援物資の受入・配分、ボランティア活動や被災地支援活動への対応、仮設住宅での自治会立上げというような様々な電話への対応等、ありとあらゆる業務に追われる毎日でした。

2年目に被災者支援室長となつて数ヶ月たったある日、心や身体の疲労とストレスが原因で、私は体調を崩してしまいました。な

んとか2年目までは勤務しましたが、翌年から約2年間、仕事を休むこととなりました。

私は音楽がとても好きで、中学で始めたホルンを今でも続けています。毎日ケースから楽器を出して練習するのが日課でしたが、体調を崩して間もないある日、突然楽器のケースに触ることができなくなりました。とてもショックな瞬間でした。

しかし、今ここでホルンから離れてしまったら……。体に鞭打って必死にホルンを吹き続けたことを覚えています。支えてくれた家族や音楽仲間がいて、2年前になんとか現在の職場で仕事復帰することができました。音楽の持つ力によって、少しずつ自分を取り戻していくことができたのだと思っています。

震災直後、それまでの地域コミュニティは失われ仮設住宅でのコミュニティ作りに懸命に取り組んできましたが、現在、仮設住宅の再編や災害公営住宅への入居、高台移転地への転居がピークを迎え、被災者や地域住民の生活環境が再度大きく変化する時期を迎えています。

そのような中、日本フィルメンバーの皆さんによる「音楽のおくりもの」活動に出会いました。平成26年度が金管五重奏、平成27年度は弦楽四重奏、そして平成28年度には弦楽四重奏とオーボエ奏者の方が、被災地宮古市へ素晴らしい「音楽のおくりもの」を届けてくださいました。

被災地区では、いまだに建物が流出した跡

久慈市は津波被害を免れた教育委員会直轄のアンバーホールがあり、被災の年にはこのホールでコンサートをを行いました。歴代の担当者は日頃の学校との連携も活発で、学校訪問、吹奏楽のクリニックなど、よく準備していただきました。

圧倒的な密着性と 連続性に感謝

岩手

久慈市教育委員会文化課主任
大崎 純

若くない年齢で地元の市職員となり、2つめの配属先となったのが文化会館。私は30代中盤までクラシックを始めとする「音楽」や、それこそ「文化活動」に触れることがほとんどありませんでした。

東日本大震災の大津波により、久慈市内では12メートルの防波堤をも超えて海岸沿いの建物1250棟が流され、数えきれない財産と、かけがえない命をも奪い去られる未曾有の被害を受けました。

震災後、日本フィルさんには「被災地に音楽を」の活動で3度も久慈市に訪問していただきました。この活動の特徴は、他の文化的な支援よりも、「圧倒的な密着性」を感じられることです。市内多数の小中高校や病院、津波で破壊されたのち復興のシンボルとして再開を果たした水族館でも行われたアウトリーチコンサートは、その場所ごとに最適な内容、実施方法を綿密に市内関係担当と一緒に打合せ、共同に作り上げることで、我々も

一体感や達成感を得ることができました。

2013年につづき、3年後の2016年にもホールでのクリニックや高校でのアウトリーチを実施していただいたことで、3年前は中学生だった子どもたちが高校に上がりプロの演奏者と再会するという、継続した活動をして頂いているからこそできる、連続性がある経験を生徒に与えてくれました。

ホールでのコンサートでも、子どもたち向けに演奏と一緒に歌ったり、久慈市を舞台とした「あまちゃん」や復興ソングである「花は咲く」を演奏していただくなど、演奏者と会場が一体となって「音楽を楽しむ」趣向を凝らしていただきました。そして毎回参加された皆さんが口にするのは「是非また来て欲しい」のお言葉です。会館に勤めるものとして大変ありがたく、嬉しく思います。このような濃密な活動を200回も継続できている、その強い信念に感嘆を禁じ得ません。



2016年6月16日 アンバーホールで市内の中・高吹奏楽部のクリニック



2016年12月13日 宮古市福祉センター。デイサービスに通う高齢者と職員の皆さん

地がそのままの状態では雑草が生い茂っていたりただの空き地になっていたりの状況ですが、かつてそこに何があったのか、どのような街並みだったのか、震災以前の状況を思い出せなくなってきました。このようにして、時間の経過とともに被災地住民の心は少しずつ荒んでいくのだろうかと感じています。

音楽の持つ「癒し」の力は何物にも代えがたく、日本フィルの皆様の活動は、津波と共にはばばらになってしまった市民の心を、再び強く結び付けてくれました。そして、6年たった今でも被災地を忘れずにご支援くださっていることに、感謝の気持ちと安心感を感じることができたと思います。



2012年1月20日 「おらほーる」周辺の7つの小学校から子どもたちがスクールバスでやってきた。

私は文化会館に勤務するまでオーケストラや音楽公演を聴いた事がありませんでした。平成24年に施行された「劇場法」では、大都市圏と地方との芸術に触れる機会の格差の解消も求められています。地方ではまずは子どもたち向けの芸術鑑賞機会を最優先すべきだと思います。多感な時期に芸術文化に触れた経験があるのと無いのでは大きな差があります。開く可能性があった扉が閉じたままで終わった人の割合は、芸術文化面においては地方の方が高いのではないかと感じます。日本フィルさんは大規模なオーケストラ公演だけではなく、「被災地に音楽を」を含めた地方への活動も精力的に行っています。私の要望は「子どもに可能性を」です。また、その要望に向けて自分自身も微々たるものではありますが尽力したいと思います。

大きな津波被害を受けた大船渡ですが、リアスホールは被災を免れ、ホールを拠点に大船渡ユネスコ協会のみなさんが準備をしました。地元のマスコミや市の機関とも連携をとりました。

**避難所だったリアスホールで
みんなが笑顔に！**

岩手

大船渡ユネスコ協会会長
山口康文

あの日、大船渡市はじめ東日本沿岸は、未曾有の津波災害に見舞われ、私たちは、家族、親類、友人、同僚…を亡くし、住んでいた家、

学校、職場を失くした。現在迄に亡くなった方は、大船渡市内だけで340名、行方不明の方が79名いる。
平成26年6月大船渡ユネスコ協会（会員126名）は日本フィル金管五重奏コンサート「音楽のおくりもの」を、被災後避難所となった大船渡市民文化会館リアスホールで行い、美しいブラスサウンドを客席に届けている。大船渡市内外から約700人が来場、多彩な音色を自在に操り、観客を魅了した。その後3日間は、市内に滞在して、学校や介護施設でコンサートや演奏指導を実施してまわった。
その後、平成27年11月28日、当協会創立40

周年記念事業の一環として日本フィル「親子で楽しむ（動物の謝肉祭）コンサート」をリアスホールで、三菱UFJニコス（株）の協賛、日本ユネスコ協会連盟の後援で開催できた。司会は、歌のおねえさん江原陽子さんが担当した。2部は、サンIIサーニス「動物の謝肉祭」。江原さんの語り、女子美術大生による絵とライオン、カンガルーなど動物たちとの共演をイメージさせる演奏が素晴らしかった。締めくくりは、「Let It Go」ありのままの笑顔でとても良かった。帰りがけに「すてきな音楽をありがとう」と子どもたちからお礼のことは、皆が喜んでいた。



2014年6月20日 大船渡の高校での演奏指導のあとで



2015年11月28日 三陸海岸をイメージしたリアスホール

久慈市の復興のシンボルともいえる水族館「もぐらんぴあ」。観光課の中野さんは、水族館のコンセプト作りから復興庁との交渉を経て完成までの全てを経験してきました。生き残ったウミガメの「かめきち」君をアイドルにした、ステキなコンサートチラシも彼の手作りでした。

**復興の水族館に
ブラスのサウンド**

岩手

久慈市観光交流課
中野創一郎

「久慈地下水族科学館もぐらんぴあ」は、久慈国家石油備蓄基地の作業坑を活用した、日本唯一の地下水族館であり、平成6年4月のオープン以来、130万人以上の方々が来場する久慈市の主要観光施設であった。

しかし、東日本大震災により、施設は全壊、200種3000匹以上の水生生物は8種21匹を除き死滅してしまっった。その後、久慈駅付近の空き店舗を活用し「もぐらんぴあ・まちなか水族館」として、仮営業を実施していたが、平成28年4月23日に、国の補助制度の活用や全国のみなさまの温かい支援等により、5年の月日を経てリニューアルオープンとなった。

この「もぐらんぴあ」で日本フィル金管五重奏団にコンサートを実施していただいたのは、平成28年6月18日のことであった。リニューアルオープンから約1ヶ月半後の新し

い水族館の水槽前という幻想的な空間で演奏いただいた。観客スペースいっぱい約1000名程度の来館者に向けて、年齢層に合せた、ジブリ、ディズニーのメドレーやクラシック音楽が、水族館のトンネル内に響き渡った。新もぐらんぴあでは初のイベントであり、旧施設を含めても金管楽の演奏は初の試みであったが、トンネル内ということで心配されていた反響音等も、演奏が始まるとむしろ心地よい音響であり、新たな水族館の魅力発見となった。

コンサートを聴いた方々の感想を聞いてみると「水族館でこんな本格的な演奏が聞けるとは思っていなかった、本当に素晴らしい映像になっていった」、「もぐらんぴあは久慈市の復興の象徴、今回の演奏でまた一つ復興を感じられた」等の素晴らしい感想が寄せられた。

今回のコンサート、ワークシヨップ等の一連のイベントを通じて、改めて思うことは、音楽のもつ力のごさであった。クラシック

音楽は良くも悪くも、多くの一般人が聞いている身近な音楽ではないと思う。しかし、知らない曲であっても人を惹き付け、感動を呼ぶ。これは年齢をこえ、地域をこえ、言語をこえるものであり、音楽の力そのものであると深く感じた。この音楽の力は、東日本大震災という未曾有の災害からの復興にはかせないものと、水族館コンサートで私は確信した。



2016年6月18日 久慈市のもぐらんぴあ(水族館)。久慈の海がテーマの水槽の前で



2011年8月6日 宮城県気仙沼市の避難所で

と自治が必要」という言葉です。6年を迎えた被災地では、ハード面の復興が進み復興住宅への転居が始まったことで、仮設住宅でのコミュニティが失われ新たなコミュニティ構築が課題となっていると聞きます。コミュニティ再生や自立支援の力にもなれる。一人ひとりに寄り添い、もっと多くの方に生の音楽を届けることが地域のひとと人を結ぶ架け橋になり、いのちを繋ぐ。そんな力が音楽にはあると思います。

三菱UFJニコス株式会社はこの活動の趣旨に賛同し、震災2年目から協賛してくださっています。柴田さんはCSR推進室の担当の2代目。下見や現地担当者との打ち合わせ、チラシの作成、移動バスの手配など、日本フィルと連携をとって一緒に行動しています。子どもたちのコーラスにもらい泣きをしたり、楽団員と寝食をともにするなかで、新たな生きがいを見つけていただいているように感じます。

**言葉のないのに確実に届く音楽の力
音楽に嫉妬した瞬間**

三菱UFJニコス株式会社
CSR推進室
柴田 和典

協賛企業

あの日のことを忘れないと誓い、自分ごととして何ができるのか考える。5年半の記憶・出来事が走馬灯のように駆け巡り、あのとときの気持ちを思いだし、これからも継続的に支援していくことを決意する。自分にとってもそんな思いを改めて強くさせてくれる、前向きになれる大切な場所。それが日本フィルハーモニー交響楽団（以下、日本フィル）さんの「被災地に音楽を」の現場です。地震に津波、そして原発事故が重なる、人類の誰も経験したことのない大複合災害。その1ヵ月後、会社から復興支援策を考えるよう命を受け、今の部署に着任しました。初めて被災地を訪問したのは、震災の3ヵ月後。沿岸部街々の壊滅的被害を目の当たりにし、言葉を失い呆然としました。自分たちができることなんて何も無いと絶望したこと

をよく覚えていきます。それでもできる限りの支援を長期的に継続することが、企業の役割であることを認識し、一企業、個人でできることはごく小さなことですが、それらが集まり継続すれば復興の原動力になると信じ、社内では社員からの募金や社員ボランティアを派遣し現地の瓦礫撤去の作業を手伝うなどの取り組みを開始しました。当時、ボランティアで実際に現地に赴いて驚いたことは、被災された方々が笑顔で元気なこと。「来てくれてありがとう」「必ず商売再開するから」などの声を聞き、前向きであることに勇気と元気をもらって帰ってくることはしょっちゅう。しかし、こちらから励まそうと思っても、実際に被災された方を前にすると、何も声を掛けることができません。気安く「頑張ってください」なんて言えません。励ますこともできず、自分の無力を痛感した時期でもありました。そんな1年が経過し、被災地ではPTSDが大きく取り上げられるなど心のケアが大きな課題となり、企業としての支援方法も見直しが必要な頃、日本フィルさんの「被災地に音楽を」の取り組みに出会いました。音楽の力に驚いたのは、初めて現地のコンサートに同行させていただいたとき。現場には一切の言葉はありません。演奏家の方が奏でる音楽だけ。目を閉じて集中して聴く方、笑いながら手拍子を打つ方、唄を口ずさむ方、静かに涙を流す方、反応は人それぞれですが最後には拍手喝采。来場者一人ひとりの心には確実に何かが届いていました。自分たちには決してできません。音楽に嫉妬した、そしてこの活動を支援することを決めた瞬間でした。



2014年7月14日 釜石市小佐野公民館で。周辺は沿岸から避難してきた人の多い地域

ふるさとから遠く離れた東京で
教会に響きわたるやさしい調べ

東京
カトリック潮見教会
担当司祭
小林 祥二

私の教区、東京都江東区にあるカトリック潮見教会のすぐそばに国家公務員宿舎東雲住宅が建てられ、震災直後まだ入居者がなかったその宿舎に、福島はじめ被災地域の方約千名が避難されました。

緊急時に入居された方々は互いの交流もなく、それぞれが孤立された状態でした。「避難されている方と結ぶ江東の会」と「東北サポーターズ」が中心となつて、「こどもクリスマス会」を教会を舞台に開催し、避難された方々を招待しています。日本フィルの皆さんにはこのクリスマス会で4回演奏していただきました。

金管五重奏や弦楽四重奏、チェロとオルガンのアンサンブル



2015年12月19日 潮見教会でのコンサート

など、クリスマスにふさわしい神々しい響きが教会の中に響き渡り、参加された親子の心を慰めました。特に、2014年には普段は讃美歌の伴奏にしか使用されていないオルガンでバッハの「トッカータとフーガ」やヘンデルの「パッサカリア」が演奏され、感動しました。教会は広く開放されており、近隣にはフィリピン人や韓国人の信徒もおります。コンサート後は、多数のボランティアの方々の手作りのご馳走でクリスマスを過ごしています。いきなり東京に放り出された不安の中で、この会では避難者同士が再会し、子どもの成長を確かめ合う貴重な日となっております。



被災地での最初の活動はどんなものでしたか。

大きな被害を受けた石巻で、震災4ヶ月後にいち早く営業を再開したアトリエがありました。この地区のコミュニティは深く傷み、人々が集えるスペースもなくなった中、カフェを併設したアトリエが再開されたのです。オーナーに共感をいただき、2011年8月にワークショップを開催することになりました。子どもたちは遊び場を失い、大人たちは日常生活の維持に精一杯。そんな中で子ども21人と大人14人が参加してくれました。

自分では出来ないかも知れないと思っていた物が、思いもよらず出来てしまった。その時の感動や驚きを見たとき、誰もが持っているアートの感性の花が咲いたと感じました。そして、その感動を共有した参加者同士の新たなコミュニティがその場で形成されたのです。この活動を継続することが被災地の方々に少しでも役立てるのではないかと実感しました。

日本フィルとの活動で感じたことは。

アートは1人ひとりの感性に訴えかけ、人々が持っている個性を引き出し、主役にする力があります。また、長年の訓練を積んだ音楽家による研ぎ澄まされた本物の響きは、人の心を癒し、包み込む力があると考えています。

日本フィルさんとは、震災前から様々な活動を一緒にしてきましたが、被災地での特に印象深い活動は、前述した石巻のアトリエで2012年8月に行ったものでした。参加者がそれぞれの感性で手作りした楽器を、日本フィルの弦楽四重奏の演奏に合わせて鳴らしながら会場内を行進しました。ヴィオラ奏者の方がとても上手くファシリテートされて、参加者たちを柔らかく包み込みながら繋げる音楽の不思議な力と、アートの力が融合した時の大きな相乗効果を感じました。これ以降も「動物の謝肉祭コンサート」など、被災地での日本フィルとのコラボレーションは幾度となく行い、その都度新しい発見がありました。



学生との活動も積極的に実施したのですね。

学生とは、これまでに30回ほど被災地での活動を行いました。学生それぞれが、出来ることを話し合い活動してきました。その中で、ひとりの学生が行ったワークショップに注目しています。テーマは「防災教育」。対象は震災を経験していなかったり、記憶していない5~8歳の子どもたちです。そんな子どもたちに、厚紙での理想の家作りと自分の姿の紙人形を作る工作ワークショップをします。「20メートルの津波が来た！さあ、君ならどうするか」という問いかけに、子どもたちはあらかじめ制作された山の上に人形を置き避難させます。小さいながらも自分で考え自分を守る行為をこのワークショップで学ぶのです。このような場は学生たちが社会との関わりを学ぶ場としても、とても有効と考えています。

今後、被災地ではどのような活動が必要だとお考えですか。

本来、人間は感動や共感という芸術的感性を魂に宿しているのだと思っています。美術や音楽は実は命の本質であり、決して付録では無いとの思いです。ひとり1人が持っている感性が現出することにより、成功体験や自己肯定感を実感してもらう。このプロセスを通じて浮揚感を感じ、それが自信に繋がっていく。

震災から丸6年が経過しようとしているいま、物理的な復興は進んでいるように見えますが、被災された方々への心の支援が必要とされるのは、むしろこれからではないかと思っています。アートや音楽が媒介となって心に働きかける支援は、今後さらに求められるでしょう。私たちの活動が、大変な経験をし、それを抱えながら自立していこうとする方たちの「自信」の一助になればと考えています。

ヤマザキ ミノリさんに聞く

“アートと音楽のちから”

ヤマザキ ミノリ

東京藝術大学構成デザイン大学院修了。空間デザイン、ラインアート、パブリックアートのデザイン制作を中心に造形作家として活動。東京藝術大学在学中の1974年に立方体内部を鏡張りにした箱型万華鏡を発明。作品展・企画個展を多数開催。現在、立方体万華鏡ワークショップを通じたユニバーサルなアートメディアの研究に取り組んでいる。女子美術大学ヒーリング表現領域教授。

東日本大震災の被災地で学生たちとともに、ワークショップ等の活動を実施している。日本フィルとは2006年より様々な形態の協働活動を実施していたが、2011年から被災地でのコラボレーションを開始。単独ではなし得ない深みのある被災地支援を継続している。



被災地での活動は、どのような思いで始めたのでしょうか。

人は絶望の淵にあるとき、心の片隅に花が咲くイメージを思い抱き、希望を持ち続けることで生きていける。経験上、この理念を体験する機会が多くあり、美術や音楽には被災地の方々の心に訴えかけ、寄り添う力があることを認識していました。とはいえ、放射能の問題や津波で街が壊滅した状況を見ると、本当にアートが必要なのかという葛藤はありました。でも、実際に行動してみると、人と芸術の本質的な関係を実感することになりました。

どんな活動がきっかけになりましたか。

東西ドイツ統一後の社会混乱で、家庭崩壊による精神的ダメージを持つ子どもたちが暮らすドイツの病院でのワークショップが活動のきっかけになっています。私が考案した立方体型の万華鏡作りのワークショップは、子どもたちはこれに不思議なほど集中して取り組み、病院からもクリエイティブな時間の共有が精神的な治癒に寄与するとの評価を得ました。誰もが創作し達成感を得ることが出来る「アート」というアプローチが人々に元気を与え、人と社会の有り様を形成する媒介に成り得ることを実感できました。



被災地を訪れた楽団員
～それぞれの思い～



厳しい環境でした。けれど演奏をしてみても、喜んでももらえている実感を得られた部分もありました。

中川 これまでに6回ほど訪問しましたが、当初は、まだ余震がある時期に行って大丈夫なんだろうか、安全面も含めて疑問もありました。また訪問前には、被災者の方から「もうやめてくれ！」と言われたケースもあると聞いていて、正直不安でした。実際に行ってみると、原発の影響のある地域と津波の被害を受けた場所では状況が大きく違うことを実感しました。被災した子どもたちと話す前に「こちらからは決して津波の話は聞かない



トランペット 橋本 洋 × ヴァイオリン 松本 克巳 × トロンボーン 岸良 開城 × チェロ 山田 智樹 × ヴィオラ 中川裕美子 × 事務局 富樫 尚代



で」と言われたことを覚えています。

岸良 阪神淡路大震災の時、自分は海外留学中でした。渡航先のテレビに映し出された映像に驚いていましたが、帰国した後に、日本フィルが音楽を届ける活動をしていたと知りました。そのことが頭にあり、最初に東日本大震災の被災地に行ったトロンボーン伊波さんにも背中を押されて、南相馬に行くことになりました。そこには放射能の問題があり、子どもたちは外で遊べません。そんな彼らが、楽器を持っているときだけは笑っているという話を胸を打たれました。彼らの「また来てね」という言葉に応えたいという思いもあり、たびたび訪問を続けています。

橋本 私も阪神淡路大震災の時は参加できませんでした。東日本大震災の後もなかなか自分自身の気持ちや状況が落ち着かず、しばらく



くたつてようやく落ち着きを取り戻してきて、被災地の状況を知りたいという気持ちもあり、被災地の活動に参加しました。よく覚えているのは、いわきで臨時に設置されたサテライト校の吹奏楽部を教えに行った時に、初めて原発の影響で家族が離散してしまっている子どもと会った時のことです。東京で反原発のキャンペーンが吹き荒れる中、そこで暮らす人々の複雑な状況を目の当たりました。

富樫 避難所の中でも、内部で自治が行われているところは非常にスムーズにやる事ができました。今後そうしたコミュニティの存在が重要になってくるのだろうと思います。現場でのコーディネーターの役割は非常に大きいし、とても助けられました。

それぞれの思いとともに被災地へ

富樫 本日はお集まりいただきありがとうございます。まず、皆さんが被災地での活動に参加されたきっかけ、それから感じられたことをお聞かせください。

松本 1995年の阪神淡路大震災の時、自分がかつて関西の大学に通っていたことや、関西に住む義理の両親の消息が一時不明であったこともありまして、自分に何ができるかを考えるためにも現地を見ておきたいと思いました。そして行くならばやはり演奏で何かできないか、ということで演奏活動を始めました。そこでの活動がとても喜ばれたということは今につながっていると思います。東日本大震災については、とんでもない広域の災害であり、これは誰かが行けばよいというレベルの問題ではなく、色々な人が関わらなければいけないと思い、それならばと先頭を切って行って、感じたことを引き継いでいこう、他の人にとっても行くきっかけとなればと思い、被災地での活動を始めました。

山田 松本さんの後に行ったのが僕らのグループだったと思います。当時、世の中全体に「自分にも何かできないか」という空気があり、私も福島の三春町が実家なので、個人としても何ができるだろうか悩んでいました。5月になってようやく三春に行く機会を得ましたが、実際に行ってみると富岡町や葛尾村から避難している方が多く、役所の開く説明会と重なっていること等もあり、決して多くの人に演奏を聞いていただけのような状況ではなく、建物の玄関先で演奏したりと、



目の当たりにした被災地の現実

松本 最初に被災地を訪問した時、とても避難所の中で演奏する雰囲気ではありませんでしたが、会場によっては、せっかく来てくれたので、と演奏環境を作ってくれる場合もありました。地元スタッフの方々の理解があるところについては長く続いていますね。避難所の生活空間の中で演奏するのは大変なことが多く、実際、大きな音をたてられたりすることもありました。そうかと思えば、布団に潜っていた人が聞きに来て、最後はお礼を言われたりすることも。そのときは、演奏してよかったなと思いましたね。全員が喜んでくれなくても、そういう人がいることが本当にありがたかったです。そういう気持ちに、なんとか応えたいと思って

演奏していましたね。

山田 体育館の玄関先で演奏した時のことです、最初は嫌な顔をしていた方が、いつの間にか聞き入って、涙を流してくれたりしたことがあります。

岸良 避難所でのつらい話もたくさん聞きました。毛布の取り合いになったり、ペットが子どもにも噛みついたり。保健室にも薬がないのでカーテンを包帯にしている状況もありました。また私は原一中に継続に行くことで、子どもたちや地域の状況が変わっていくのがよくわかりました。中には家族を津波で失った子もいました。

松本 印象的だったのは、最初の訪問の時は、『川の流れるように』は水に関わるので厳しいという意見を頂きました。海、水に関わるものは一切駄目、ということもありました。それから1年ほどたって『斎太郎節』を演奏した時に、「元気が出る」と喜んでもらえたのが印象的でした。その曲はそれから本当に何度も繰り返し演奏しました。

岸良 トロンボーンについては「ソング・フォー・ジャパン」というオランダ発のプロジェクトがともありがたかったですね。私もこれに参加しましたが、世界中が応援してくれているということが感じられました。

震災から6年。これからの活動に思うこと

松本 2017年3月で震災から6年ですが、阪神淡路大震災では5年ですべての避難所がなくなり、その最後まで神戸に通い続けました。5年ではぼ立ち直ることができたわけでは

音楽の力を信じてくれたこと、良い場面がたくさん作れたことは良かったなと思います。そこには日本フィルが九州でやってきた経験がずいぶんと活きていると思います。

中川 顔の見える活動を続けていくことが大事だと思います。室内楽で行くことにも意味があるので、そこはこだわっていききたいと思いますね。老人福祉施設等への訪問の機会が多いのですが、震災直後に比べて訪問してくれる団体が減ってきていて、忘れられつつあると感じているようです。さらに、今後、同じことを繰り返していいのか、ということも考えています。2016年5月に南相馬市でワークショップを行いました。子どもたちの団結力、エネルギーはこんな状況でも



健在なんだと驚きました。今後、彼らに何か形にする目標を設定してあげるとよい気がします。例えば、日本フィルと一緒にステージできちんと責任を持たせて共演するとか。また、コーディネーターの方たち同士がネットワークを構築し、情報交換をしていくことができる、さらに実り多い関係になると思います。施設同士はなかなかコミュニケーションが取れていない部分もあるようですし、日本フィルがそうしたことのお手伝いができるとういことだと思います。

岸良 いずれオーケストラで被災地に行きたいと思っています。やはりオーケストラとしてそこは外せないと思いますね。

山田 当時から「今、被災地の人々に音楽が必要なのか？」という疑問を常に持っています。個人で三春に帰省した時、「東京は冷たいよな」という声をよく耳にしました。一方では「もうほっておいてほしい」という声もあったり、場所により状況は様々です。被災地のニーズや状況を知ることが大事だと思っています。一人の人間として被災地の応援は今後も続けていきたいと思っています。

橋本 僕の率直な気持ちは、求めてくれる限りはぜひ音楽を届けに行きたいという思いです。どこでも、要望がある限りは訪問していきたいと思っています。同時に被災地の状況を自分自身がよく見て、知りたいとも思っています。被災地に行つて、僕らが現地での生の声を色々と聞けることも大変意味あることですね。また、今回我々が被災地で見聞きしたことが、次にもし大きな災害が起こった時に、役立てていけるかもしれないと思います。

す。一方で東北の場合は、何度行っても津波の後に生活空間が戻っていない。海岸線に高い壁が立っているだけです。それがすごくショックだし、景観も変わってしまった。復興の実感を持ってないし、多くの方が元々の場所から離れたままです。仮設で一生暮らすしかないのか、という声を聞くととても複雑で、辛い気持ちになります。

富樫 震災から5年目の2016年は、復興しつつある地域を訪問するというテーマで前向きなイベントもすることができました。自治体のスタッフの方がとても苦心してくれたこともありました。復興のキーマンの方々が



松本 コンサートのみでなく交流する場所を持つことも、とても良い機会だと思っています。僕は、音楽は「心の扉を開ける鍵になる力」を持っているように思います。言えなかったことが言えて、その結果心が軽くなったりする、そうした力を実感しています。音楽の聴き方は人それぞれですが、これからも皆さんの心の扉を開ける鍵になれるといいですね。

● 地域別開催実績

※開催地区を自治体ごとに赤丸で示しています。



開催地域	コンサート	演奏指導
岩手県	59	8
宮城県	54	4
福島県	49	19
山形県	1	1
茨城県	4	0
埼玉県	3	0
東京都	7	0
計	177	32

これまでに、延べ約18,000人の皆さまに音楽をお届けしました。

岩手、宮城、福島、茨城各県の被災地を訪問するとともに、山形や関東に避難している方々も対象としています。

● 年別開催数

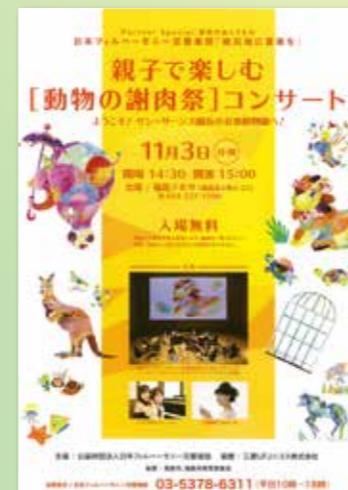
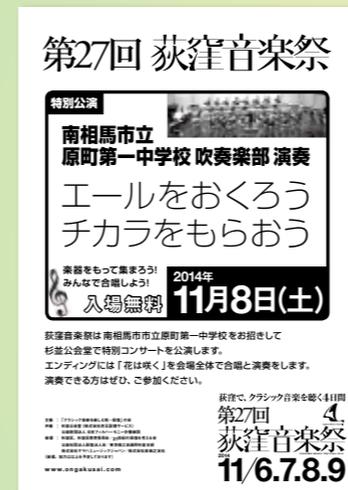
	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	計
コンサート	50	32	25	32	14	20	173
演奏指導 ワークショップ	3	7	10	6	6	4	36

※時間の経過による被災地の状況を勘案し、内容を変化させながら活動を続けてきました。2017年においても20回程度の実施を計画しています。

● 会場種類別開催数

避難所	仮設住宅 集会所	小中高校	高齢者施設	市町村施設	コンサートホール	その他
29	10	87	8	40	18	17

※コンサートや演奏指導は基本的に現地からの要請に基づき実施しています。開催日、開催場所などの決定については、現地のコーディネーターの方々のご協力をいただいています。



● 「被災地に音楽を」実施一覧 ② (2012年8月9日～2014年6月19日)

開催日	会場		編成
2012年	8月9日	宮城県 石巻市	・「こ～ぶのお家 いしのまき」 弦楽四重奏
	8月26日	宮城県 南三陸町	・さんさカフェ出版会 Tb・Tu
	9月19日	福島県 福島市	・平野中学校 ・市商工会 (福島市音楽堂) 弦楽四重奏
	9月20日		・松川工業団地 (第一仮設住宅集会所) 松川工業団地 (第二仮設住宅集会所)
	9月21日		・飯野中学校
	9月30日	東京都 江東区	・カトリック潮見教会 金管五重奏
	10月24日	福島県 南相馬市	・鹿島小学校 ・農家民宿いちばん星 弦楽四重奏
	10月25日		・南相馬市民文化会館 ・同左ウェルカムコンサート
	10月26日		・三春小学校
	10月27日	いわき市	・江名中学校 (コンサート) 弦楽四重奏・Tb Tb 弦楽四重奏
	10月27日		・江名中学校 (クリニック)
	10月27日		・内郷第二中学校
	12月14日	茨城県 茨城町	・明光中学校 ・梅香中学校 金管五重奏
	12月15日	福島県 いわき市 小名浜市	・双葉高校、双葉翔陽高校、富岡高校サテライト校 (クリニック) 金管五重奏・Cl・Per ・小名浜市民会館
2013年	3月3日	宮城県 石巻市	・石巻市役所市民サロン 弦楽四重奏
	3月4日		・「こ～ぶのお家 いしのまき」 ・女川野球場仮設住宅
	3月5日		・みなと荘
	3月21日	宮城県 南三陸町	・志津川中学校 (コンサート) Cl 三重奏 Cl Cl 三重奏
	3月21日		・志津川中学校 (クリニック)
	3月22日		・南方仮設住宅集会所
	4月3日	福島県 南相馬市	・原町第二中学校 管楽合奏
	4月4日		・鹿島中学校
	4月5日		・石神中学校
	4月6日		・原町第一中学校
	5月27日	岩手県 下閉伊郡	・田野畑村 田野畑中学校 ・田野畑アズヴィーホール 弦楽四重奏
	5月28日		・普代村うねとり荘 ・普代中学校
	5月29日	九戸郡	・野田村 野田小学校
	6月16日	岩手県 大船渡市	・宮田応急仮設住宅 弦楽四重奏
	6月17日		・気仙光陵支援学校 ・上平応急仮設住宅
	6月18日		・御喜来小学校
	6月23日	宮城県 石巻市	・石巻市総合体育館 管楽合奏
	10月22日	福島県 南相馬市	・原町第一中学校 管楽合奏
	10月23日		・高平小学校
	10月24日		・原町第三小学校・金房小学校・福浦小学校・鳩原小学校
	10月25日		・原町第二小学校
	11月15日	岩手県 陸前高田市	・「朝日のあたる家」 管楽合奏
	11月16日		・第一中学校・高田東中学校
	11月17日		・陸前高田高校
	11月29日	岩手県 久慈市	・宇部小学校 管楽合奏
	11月30日		・久慈中学校
	12月1日	洋野町	・長内中学校・夏井中学校 ・アンバーホール
	12月1日		・種市中学校・大野中学校 ・種市中学校
	12月9日	東京都 江東区	・潮見教会 弦楽四重奏
2014年	1月14日	福島県 三春町	・三春交流館 (まほら) 弦楽四重奏
	4月3日	福島県 南相馬市	・原町第三中学校 管楽合奏
	4月4日		・石神中学校
	4月5日		・原町第一中学校
	4月28日	宮城県 南三陸町	・登米第二仮設住宅 弦楽四重奏
	4月29日	石巻市	・野球場仮設住宅
	4月30日	気仙沼市	・「こ～ぶのお家 いしのまき」 NPOオレンジネットワーク
	6月17日	岩手県 大船渡市	・第一中学校 管楽合奏
	6月18日		・大船渡東高等学校
	6月19日		・さんりくの園
	6月19日		・リアスホール

● 「被災地に音楽を」実施一覧 ① (2011年4月6日～2012年8月8日)

開催日	会場		編成
2011年	4月6日	福島県 二本松市	・東和文化センター Vn・Va・Tb
	5月4日	福島県 会津若松市	・文化センター 弦楽四重奏
	5月6日	埼玉県 加須市	・騎西小学校 (福島双葉町児童含む) 弦楽四重奏
	5月8日	宮城県 名取市	・増田西小学校 (避難所) ・文化会館 (避難所) Vn・Kb
	5月8日		・関上地区日和山
	5月9日	気仙沼市	・階上中学校 (避難所) ・松岩公民館 (避難所)
	5月9日		・階上中学校 (避難所)
	5月10日	石巻市	・石巻高校 (避難所) ・湊小学校 (避難所) ・門脇中学校 (避難所) ・石巻中学校 (避難所)
	5月10日		・北上子育てセンター
	5月12日	埼玉県 加須市	・騎西中学校 (福島県双葉町の生徒を含む) 金管五重奏
	6月4日	岩手県 花巻市	・山の神温泉「幸迎館」(避難所) Vn・Vc
	6月5日	釜石市	・甲子中学校 (避難所)
	6月6日	大船渡市	・リアスホール (避難所)
	6月5日	福島県 三春町	・田園生活館 (避難所) 弦楽四重奏
	6月6日		・町営体育館 (避難所) ・三春小学校
	6月25日	福島県 南相馬市	・鹿島保険センター (避難所) 弦楽四重奏
	6月26日		・原町第二中学校 (避難所) ・道の駅南相馬 (避難所)
	6月26日		・原町第一小学校 (避難所)
	6月25日	福島県 二本松市	・JICA 研修センター Cl・Ob・Fg
	6月26日	大玉村	・フォレストパークあだたら
	7月10日	宮城県 南三陸町	・志津川高等学校 管楽合奏
	7月11日		・志津川中学校
	8月6日	宮城県 気仙沼市	・日本バプテスト教会 弦楽四重奏
	8月6日		・階上小学校 (避難所)
	10月4日	宮城県 東松島市 石巻市	・鳴瀬第一中学校 弦楽四重奏
	10月4日		・北上中学校
	10月5日		・石巻専修大学学生ホール ・「あとリエ DaDa」
	10月6日	仙台市	・追分温泉 (避難所)
	10月7日		・泉白陵会 (介護施設)
	10月7日		・愛泉会 (障害者施設)
	10月20日	福島県 いわき市	・江名中学校 (コンサート) 弦楽四重奏
	10月20日		・下神白第一集会所 Tb 弦楽四重奏
	10月21日		・江名中学校 (クリニック)
	10月21日		・内郷第二中学校
	10月26日	茨城県 大洗町	・南中学校 弦楽四重奏
	11月21日	岩手県 陸前高田市	・第一中学校 弦楽四重奏
	11月22日	花巻市	・山の神温泉「幸迎館」
	11月24日	福島県 福島市	・みず和の郷 (介護施設) 弦楽四重奏
	11月24日		・飯野学習センター
	11月25日		・南体育館 (研修室)
2012年	1月20日	岩手県 久慈市	・山村文化交流センター 弦楽五重奏
	1月21日		・文化会館 (小中学生対象コンサート) 管楽合奏・Pf
	1月22日		・文化会館 (親子対象コンサート)
	3月27日	福島県 南相馬市	・原町第一中学校 FI・Cl・Tp・Hr・Tb
	3月28日	伊達市	・桃陵中学校
	3月29日	南相馬市	・鹿島中学校
	3月30日		・原町第一中学校
	3月28日	福島県 三春町	・三春小学校 Vn・Va・Vc・Tb
	3月28日	埼玉県 加須市	・騎西コミュニティセンター 弦楽四重奏
	5月20日	宮城県 南三陸町	・志津川中学校 弦楽四重奏
	5月20日		・さんさん商店街 ・ホテル観洋ロビー
	5月21日		・南方仮設住宅集会所
	6月17日	山形県 米沢市	・八幡原体育館 木管五重奏
	6月17日		・市体育館ほか Cl・Ob・Fg・Hr
	8月7日	宮城県 石巻市	・北上中学校 弦楽四重奏
	8月8日		・同校体育館 (岡崎市立城北中) ・「あとリエ DaDa」

「被災地に音楽を」をご支援いただいた皆さまに心より御礼申し上げます。

- 呼びかけに応じていただいた国内外の多くの個人の皆さま
- 株式会社三菱東京UFJ銀行、三菱UFJニコス株式会社、ローム株式会社 はじめ多くの法人・団体によるご支援



©山口敦

日本フィルの「被災地に音楽を」を応援してください

〈お願い〉

- 日本フィルメンバーを被災地に派遣するための交通費、宿泊費など必要経費のための募金にご協力ください。
- 演奏できる会場、場所についての情報を提供してください。
- コーディネートをしてくださる団体、個人を募集します。

当団は「特定公益増進法人」の許可を受けております。個人による寄付の場合も「特定寄付」として所得額から一定の算式によって控除できます。(所得税法施行令217条1項第2条また第3号による)なお、銀行振込で申告にかかわる必要書類を希望される場合は、お振込後、日本フィル宛にご連絡をお願いいたします。

〈お振込先〉

- 郵便振替 00160-6-789789
加入者名 日本フィル「被災地に音楽を」
- 銀行振込 三菱東京UFJ銀行 高円寺支店
口座番号 普通 0065261
口座名 日本フィル被災地に音楽を

編集後記

「被災地に音楽を」の活動が5年を過ぎたころ、「まだやるの?」「いつまで続けるの?」という問いかけが、ぼつぼつ寄せられました。それは「なぜやめるの?」という問いにつながりました。

人々の記憶は鮮明さを失い、支援活動も少なくなりました。しかし、たった6年です。わたしたちは「また来てほしい」「また聴きたいね」という声があれば、愚直に東北に音楽を届け続けます。大きな悲しみを背負ったその土地で、人々が集まって再び笑いあう。

この小さな火をひとつ、またひとつ灯し、それが消えないよう大切に守り続けることがいま、私たちにできることなのかもしれないと思います。

編集担当一同

「被災地に音楽を」

～東日本大震災 被災地での6年間の活動記録～

発行日 2017年3月1日
発行 公益財団法人 日本フィルハーモニー交響楽団
〒166-0011 東京都杉並区梅里1-6-1
TEL 03(5378)6311 Fax 03(5378)6161
URL : <http://www.japanphil.or.jp>

● 「被災地に音楽を」実施一覧 ③ (2014年6月20日～2016年12月13日)

開催日	会場		編成		
2014年	6月20日	岩手県 大船渡市	・宮田忠急仮設 ・大船渡高等学校	室内合奏団	
	7月6日	宮城県 南三陸町	・志津川高等学校 ・志津川高等学校	Tb・Per Tub	
	7月7日				
	7月14日	岩手県 釜石市	・唐丹中学校	・小佐野公民館	弦楽四重奏
	7月15日		・旧釜石商業高校体育館	・カトリック釜石教会	
	7月16日		・鶴住居小学校・東中学校	・栗林小学校	
	11月2日	宮城県 名取市	・名取市文化会館		弦楽四重奏
	11月3日	福島県 福島市	・福島テルサ		管弦楽合奏
	11月4日	宮城県 東松島市	・東松島コミュニティセンター		管弦楽合奏
	11月8日	東京都 杉並区	・荻窪音楽祭		吹奏楽合奏
	11月28日	岩手県 宮古市	・第一中学校		管楽合奏
	11月29日		・港南中学校	・千徳小学校	
	11月30日		・宮古小学校(クリニック)	・宮古小学校(コンサート)	
12月1日		・田老町サポートセンター			
12月9日	岩手県 釜石市	・東中学校		弦楽四重奏	
12月10日		・祥雲支援学校			
12月15日	福島県 伊達市	・保原小学校	・保原町商工会	弦楽四重奏	
12月20日	東京都 江東区	・カトリック潮見教会		弦楽四重奏	
12月23日	福島県 南相馬市	・南相馬市民文化会館		弦楽四重奏	
2015年	5月1日	福島県 南相馬市	・原町第二小学校(コンサート)	・原町第二小学校(クリニック)	金管五重奏
	5月2日		・原町第一中学校(クリニック)		
	5月3日		・原町第一中学校(クリニック)		
	5月29日	岩手県 山田町	・県立山田高校		弦楽四重奏
	5月30日		・町立北小学校	・介護事業所「恵みの里眺望」	
	5月31日		・いきがいデイサロン	・いっばいっぼ岩手	
	6月19日	岩手県 宮古市	・高浜小学校	・宮古恵風支援学校	弦楽四重奏
	6月20日		・山口公民館	・かがやきデイサロン	
	9月4日	福島県 南相馬市	・同慶寺		金管五重奏
	9月5日		・原町第一中学校、原町高等学校		
9月6日		・南相馬市民文化会館			
11月8日	東京都 杉並区	・荻窪音楽祭		吹奏楽合奏	
11月28日	岩手県 大船渡市	・リアスホール		動物の謝肉祭	
11月30日	福島県 南相馬市	・鹿島生涯学習センター		動物の謝肉祭	
12月19日	東京都 江東区	・カトリック潮見教会		金管五重奏	
2016年	4月2日	福島県 南相馬市	・同慶寺		弦楽四重奏・Cl
	4月3日		・原町第一中学校		
	5月6日	福島県 南相馬市	・原町第一中学校(ワークショップ)		マイケル・スパンサー 弦楽四重奏
	5月7日				
	6月16日	岩手県 久慈市	・アンバーホール(クリニック)		金管五重奏
	6月17日		・アンバーホール(コンサート)		
	6月18日		・久慈高校	・もぐらんぴあ	
	8月26日	宮城県 山元町	・花釜区交流センター		金管五重奏
	8月27日		・山下中学校 ・山元町こどもセンター		管楽合奏
	8月28日	名取市	・名取市増田児童センター		
10月31日	宮城県 南三陸町	・南三陸病院	・慈恵園	弦楽四重奏	
11月1日		・オーリングハウス	・川の上・百俵館		
11月2日		・「こ〜ぶのお家 いしのまき」			
11月13日	東京都 杉並区	・荻窪音楽祭		吹奏楽合奏	
12月11日	岩手県 山田町	・山田町コミュニティセンター		弦楽四重奏・Ob	
		・いっばいっぼ岩手			
	宮古市	・宮古市民会館			
12月12日		・田老サポートセンター			
12月13日		・恵風支援学校	・総合福祉センター		